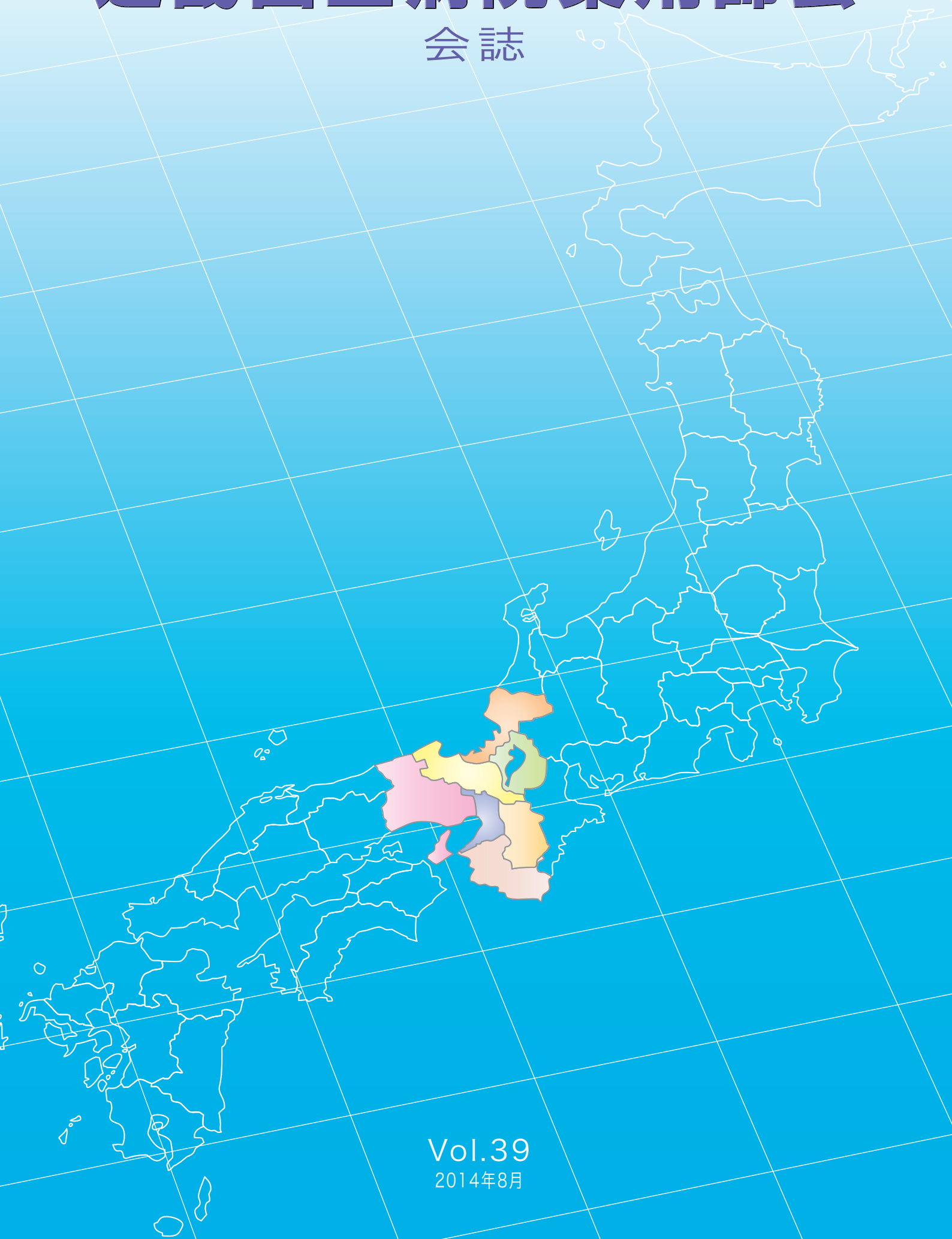


# 近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.39  
2014年8月

## 目 次

提言.....	3
	紫香楽病院 廣畑 和弘
薬剤科紹介.....	4
	大阪南医療センター 政道 修二
平成 26 年度近畿国立病院薬剤師会業務検討委員会主催研修会報告.....	6
	南和歌山医療センター 井上 敦介
「第 57 回 日本糖尿病学会年次学術集会」に参加して.....	8
	紫香楽病院 内海 真和
「第 19 回 緩和医療学会学術大会」に参加して.....	9
	京都医療センター 田邨 保之
「病院・大学・薬局薬剤師のための臨床研究セミナー2013」に参加して.....	10
	宇多野病院 細田 敦規
「平成 26 年度 初級者臨床研究コーディネーター養成研修」に参加して.....	11
	東近江総合医療センター 寺井 美貴
平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会 教育研修委員会主催中堅薬剤師研修会報告.....	12
	京都医療センター 水津 智樹
「平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会教育研修委員会主催中堅薬剤師研修会」に参加して.....	13
	福井病院 吉川 三保子
地区会報告.....	14
	近畿中央胸部疾患センター 古川 順章
「平成 26 年度新採用職員研修」に参加して.....	15
	南京都病院 脇 啓子 京都医療センター 上田 浩人

病院薬剤師になって.....	17
東近江総合医療センター	松井 駿亮
舞鶴医療センター	生越 由美
京都医療センター	宮地 由香里
京都医療センター	小玉 美希子
趣味のページ ～部活～.....	21
大阪医療センター	坂倉 広大
編集後記.....	23

## 提言

紫香楽病院 廣畑 和弘

私が勤務する紫香楽病院は、滋賀県の一番南の端に位置する甲賀市信楽町にあり、重症心身障がい児（者）医療の確保と向上及び地域住民の保健、福祉の増進を図るために設立されました。標高約 250m、人口は 13,000 人弱、過疎化や少子高齢化が進行しています。平均すると 1 日約 70 人の外来患者がありますが、お年寄りが圧倒的に多く、生活習慣病が大半で、高血圧、糖尿病、変形性関節症などが主な病気です。患者さんは長い付き合いの方がほとんどで、ゆったりとした時間の流れ方は都会とは違います。勤務している薬剤師は、総合的な薬剤科業務の習熟に向けて研鑽を積んでおり、服薬指導における慢性疾患管理の重要性はもちろんのこと、「予防」や「支える」医療の方向性を強く意識しています。

先日、新しい服薬指導管理システムの導入に際し、患者向けのお薬説明書について医局会より意見をいただきました。それは、副作用欄の記載内容が画一的で個人の状況が反映されていない点は問題ではないか、患者は自身の状況に応じたオーダーメイドの情報を期待している、との「提言」でした。形式的に用紙を渡すだけの情報提供は患者に情報を伝えたことにならないし患者の聞きたいことは引き出せないのです。薬剤師には、医薬品の知識のみならず、患者情報を的確に把握して、服薬が確実に実践できるようにサポートする高度なコミュニケーション能力と情報処理能力が要求されます。心ならずもデジタルデータの利便性に流されて、生きた服薬指導が実践できていない現状を反省すると同時に一定の限界も感じています。現在、薬剤科では対応策を検討中です。

これからは、優れた「チーム薬剤科」を作る事が非常にものを言う時代になりそうです。そのための方法論は数多くあると思いますが、私は「提言は受けとる」ものだと考えています。薬剤科スタッフや他部門からの「提言」に注意深く耳を傾け、皆で真剣に結果を出すという「改善」を続ける努力が、優れたチーム力を育成し、組織に貢献できる秘訣ではないかと思っています。チーム力とはアイデアの質であると確信しています。

薬剤師は、在宅医療への参画、処方設計への支援など、医療チームの一員としてより積極的な役割を果たすことが求められています。我々は社会が期待する「職能の進化」に、即時対応しなければなりません。「病態と薬理を理解して薬学的ケアを実践する」ことは当然で、専門的な「知識」と「技術」を磨くために自己研鑽を継続し資質の向上を図っていかねばなりません。このような状況において、薬学がより科学的になってゆく一方、忘れがちになる本来の「薬学」をどのように回復するかは大きな課題です。一人ひとりの患者さんに最適な医療サービスを提供するためには、患者さんを理解するための心が必要です。それは薬剤師自身の内面を鍛えることによって可能であり、病める人の立場に立つ総合的な医療人の育成には、個人の能力を引き出し人間としての成長を促すことが必要です。大切なことは「敬意」を持って患者さんに接することだと思います。良い薬剤師になるためには職場環境は問題ではありません。「地元に戻ろう」ではありませんが地域住民の福祉の向上を提供する事を実践できる「地方勤務」の重要性を感じています。このような精神を理解し、地域医療を支える気概にあふれた有能な先生方の活躍を心より期待しています。

## 薬剤科紹介



独立行政法人 国立病院機構

## 大阪南医療センター

当院ロゴマークはOsaka MinamiのOとMをモチーフに、まあるい、心（ハートマーク）温まる医療を表現している

## 病院概要

当院は大阪南河内の地にあり、河内長野市はもとより富田林市、大阪狭山市、堺市、遠くは和歌山橋本市、奈良県を診療圏として地域の中核をなす医療施設で全24診療科480床の基幹病院である。リウマチ・アレルギー疾患、がん疾患の政策医療を推進するとともに、地域の医療機関との連携も強固に、良好な医療サービスを提供している。

## 薬剤科紹介

薬剤科においては30名の薬剤師（科長、副科長2名、主任5名、ほか22名）、助手3名の大所帯で、がん、緩和医療、リウマチ、NST、ICT、DMをはじめとしたチーム医療にも力を注いでいる。

政策医療であるがん診療においては、株式会社ユヤマと共同開発した抗がん剤監査支援システムを利用し、がん化学療法レジメン管理（スケジュール、投与量、臨床検査値など）を実施し、入院・外来の抗がん剤調製、前処置薬の調製を行っている。また、経口抗がん剤治療を受けられている外来患者さまには、薬剤師外来を開設し、月50例ほどであるが、より有効、安全、安心ながん化学療法の実践を試みている。今後、更に診療科を拡充する方針である。

薬剤管理指導は月1,100件実施を目標に掲げ、おおよそ1,000件前後を達成している。これは当業務対象入院患者の約8割に相当する。退院時指導については月140件程度にとどまっており、完全実施に向け、業務の見直し、効率化を図っていかねばならないと考えている。

病棟薬剤業務実施加算については2012年当初より取得し、1フロア2病棟3薬剤師の配置を基本にカバーできるよう、科員を3グループに分け、各グループ内で業務調整を行

い 4 時間／日以上の病棟業務を実現している。病棟での薬剤に係わるあらゆる段階でのあらゆる事に薬剤師が関与することで医薬品使用におけるヒヤリ・ハット事象の低減を図れるものと期待している。

当センターは 2010 年 8 月、WHO・ユニセフより「赤ちゃんにやさしい病院 (BFH: Baby Friendly Hospital)」の認定を受け、「母乳育児を成功させるための 10 カ条」を長期にわたって遵守し、地域産科施設、行政とも連携を密にし、妊婦・授乳婦への支援活動を行っている。当科においても妊娠・出産を希望される方への情報提供、服薬支援や投薬下での母乳育児継続に関する相談、支援に取り組んでいる。

治験の取り組みは薬剤師 3 名が CRC として治験管理室に専従で当たっている。2013 年度は 36 課題を契約し、国立病院機構で 13 位の実績を上げており、また医師主導の臨床試験、調査研究には専従 CRC 以外の薬剤師も関わっている。

本年 6 月の薬剤師法改正を受け、入院患者のみならず外来患者への指導、教育にも取り組みを加速する必要がある。30 名の大所帯とはいえ業務の多寡を考えると、決して余裕があるわけではない。

薬剤科長の『はたらく』(まわり「端」が「楽」になるよう考えながら仕事をこなす)と『和』を合い言葉に、科員一丸となって日々、業務に取り組んでいる。



(文責 政道)



## 平成26年度近畿国立病院薬剤師会業務検討委員会主催講演会報告

南和歌山医療センター 井上 敦介

日時 : 平成26年6月28日(土) 14:00~17:00

場所 : KKRホテル大阪 オリオンの間 14階

参加人数 : 158名

テーマ 「病棟薬剤業務実施加算が新設されて2年が経過して」

1. アンケート報告 医薬品情報小委員長 別府 博仁 (あわら病院)
2. 会員報告 進行:業務検討委員会副委員長 川戸 順之 (大阪医療センター)  
大津 幸 先生 (大阪南医療センター)  
永井 聡子 先生 (京都医療センター)  
上野 裕之 先生 (大阪医療センター)  
小林 勝昭 先生 (近畿胸部疾患センター)
3. パネルディスカッション  
議長:業務検討委員会委員長 上野 裕之 (大阪医療センター)

平成24年度の診療報酬改定では薬剤師の病棟配置が診療報酬のなかで評価され、「病棟薬剤業務実施加算」が新設された。近畿ブロック管内では既に12施設で実施・算定されており、今後、施設基準取得を予定している施設もある。そこで今回、「病棟薬剤業務実施加算が新設されて2年が経過して」というテーマで、各施設からのアンケート報告、ならびに会員報告が行われた。



アンケート報告では、「病棟薬剤業務実施加算」の取得にあたり、大多数の施設で調剤業務をはじめ薬務、DIなど薬剤業務の効率化を図るための見直しが行われていた。算定条件を満たすには人と時間を捻出する必要があり、その確保のため各施設で様々な工夫が行われていた。今後も国立病院機構のネットワ

ークを生かし、施設間の情報共有を強化していく必要性が感じられた。

次の会員報告では、4施設から実際に行われている病棟薬剤業務について具体的な取り組み内容やその評価、問題点などが発表された。今後の課題は、「病棟薬剤業務の質の向上」であり、多くの時間を占める持参薬確認業務の効率化は言うまでもなく、DI室との連携強化やスタッフ間での情報共有も欠かせないことである。病棟薬剤業務を通じて医療安全に薬剤師が不可欠となるよう、入院から退院まで途切れのない一貫した薬学的管理を行っていくことが大切であると思われた。

最後のパネルディスカッションでは、フロアの全参加者を対象に質問形式で行われた。また、トピックスとして本年6月12日から施行された改正薬剤師法（第25条の2 情報の提供及び指導）について、今後行うべき対応策が意見交換された。さらには、昨今問題となっている危険運転致死傷罪についても話題提供がなされ、添付文書の使用上の注意に自動車運転等の禁止等の記載がある医薬品に対しては、注意喚起の説明が不可欠であることがディスカッションされた。



このように、我々病院薬剤師の果たすべき役割は山積しており、今回のテーマである「病棟薬剤業務実施加算が新設されて2年が経過して」は、ややもすれば時間に流されつつある日常業務について改めて考え直す良い契機となった。聴講にあたり会の運営にご関係、ご尽力された先生方に深謝申し上げたい。



## 「第 57 回 日本糖尿病学会年次学術集会」に参加して

紫香楽病院 内海 真和

平成 26 年 5 月 22 日（木）から 24 日（土）にかけて大阪、中之島の大阪国際会議場にて開催された第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会に参加しました。

本学会のテーマは「糖尿病とともに生きる～夢から実践へ～」であり、学術集会を通じて将来の夢を追う研究と患者の心に寄り添う実践の橋渡しを行い、糖尿病患者を勇気づける成果を得たいという思いから設定されたとのことでした。

紫香楽病院は重症心身障がい児(者)医療、神経難病医療、および地域医療を含むそれらを支える一般医療を主体としており、糖尿病の他にもさまざまな疾患をお持ちの方がいらっしゃいます。私は本学会に参加するにあたり解決したい課題がありました。

当時の受け持ちの患者さんで、パーキンソン病における振戦が強く、インスリン自己注射後の針の取り外しがうまくゆかず針刺しのリスクが高い方がおられました。

インスリン付属器具でも取り外しの為の補助具があり、それを使っていただきましたが補助具にうまく針を入れることが難しく使いづらいことがわかりました。

はじめは製薬メーカーのブースにて他の補助具等がないか確認していたのですが、各社ともにないとの回答であり諦めかけていた時、滑り止めを使用した針の着脱方法を紹介されているポスター発表に出会うことができました。発表の時間に立ち会うことができなかつたため、演者と直接お話することはできなかったのですが、関連資料を頂き実際に試してみるとより安全に取り外しができることがわかりました。

この他にも今まで知り得なかった知識や考え方を学ぶことができ、これからも病棟活動を頑張っていこうという想いが強くなりました。

今回は聴講のみだったのですが、今回はこのような場所で発表できるように頑張りたいと思います。

## 「第19回 緩和医療学会学術大会」に参加して

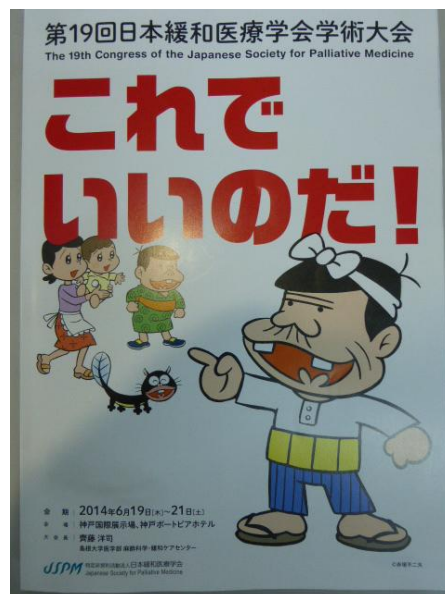
京都医療センター 田邨 保之

平成26年6月20日（金）～6月21日（土）の2日間、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテルで第19回日本緩和医療学会学術大会が開催され、参加させていただきましたので報告いたします。

本大会のテーマは「これでいいのだ」。患者さんや家族が過ごす一瞬、そして日々を「これでよかった。これでいいのだ!」と思える、その人らしい生活を支えることを目標とし、医療者は日々の緩和ケアを振り返り、最善の緩和医療を提供できることを目指し、様々な研究や業務の取り組みが報告されていました。

緩和ケアは重篤な疾患による痛みやその他の苦痛を軽減することであり、心理社会面、スピリチュアルな側面に配慮しながら、患者、家族の双方のQOLの改善を目指す。この緩和ケアの中で薬剤師の役割は、薬学的視点による処方監査と情報提供を基盤とした薬物療法の支援である。この数年、メサドン塩酸塩錠、フェンタニル速放製剤、タペンタドール塩酸塩錠などの新しいオピオイド製剤の発売が続いている。そのため選択肢が増え患者の病態に適した薬剤の使用が可能になるが、新薬においては使用経験が少ない分、薬学的な性質、注意点をよく理解して対応することが求められる。またこれらは製剤特徴、安全面で、用量用法、投与間隔、副作用モニタリング（心電図検査、電解質検査等）の管理を必要とし、薬剤師としての薬学的管理が特に重要になり、入院だけでなく、外来、在宅まで幅広く病院薬剤師が活躍できると感じました。

本学会は、麻薬やその他の症状緩和の薬剤の最新情報、薬物療法、チーム医療、在宅と幅広い分野のことが学べる場なので、ぜひ参加してみたいかかでしょうか。



## 「病院・大学・薬局薬剤師のための臨床研究セミナー2013」に参加して

宇多野病院 細田 敦規

私は学生時代に大学と病院と共同の臨床研究に関わらせて頂き、その研究について 2012 年には学会発表もさせて頂きました。しかし、その学会発表以来、研究をしない日々が続き、折角学生時代に得た知識や考え方が徐々に薄れていっていること、何の研究もしないままただ目の前の業務だけをこなしていることに危機感を感じました。そこにちょうど薬剤科長からの紹介があり、臨床研究の組立て方を学ぶことは勿論、研究に対する熱意と姿勢を取り戻すという意味も込めて病院・大学・薬局薬剤師のための臨床研究セミナー2013に参加させて頂きました。このセミナーは1月18日に東京の日本薬学会長井記念館で開催されました。参加者は200人以上にのぼり、私と同じような1~2年目の薬剤師の姿も多く見受けられました。このセミナーでは1日を通して臨床研究にあたっての心構えから、研究計画立案のノウハウ、統計の知識、各分野での研究の実際について学びました。臨床研究の組み立て方を学びたかった私にとっては、特に臨床研究立案のノウハウに関する講義が興味深かったです。この講義では臨床上で生じた疑問からプロトコールを組み立てていく流れについて学ぶことができました。

内容について以下に簡単にまとめました。

- 1) 自分が関わる日常診療から生じた漠然とした疑問(Clinical Question)を構造化し、研究課題(Research Question)とする流れについて。
- 2) Research Question を明確化することについて。プロトコールの作成について。

- ・ Research Question が明確でない研究では結果の妥当性や信頼性に問題が出てくる。

- ・ プロトコールを作ったらその内容は守る。決めたルールを破ると信憑性が失われる。

この講義では“疑問を明確化、構造化すること”について繰り返し話されており、臨床研究を始めるにあたり非常に重要なものであるということが分かりました。多くの講義がありましたが、一番印象に残っているのはやはりこの講義だったと感じています。

このセミナーに参加したことで目的としていた知識の習得もでき、研究に対する熱意も湧きました。これをきっかけに臨床の現場で生じた課題について臨床研究を行い、より良い薬物治療の提供に寄与できるよう努力したいと考えています。

「平成 26 年度 初級者臨床研究コーディネーター養成研修」に参加して

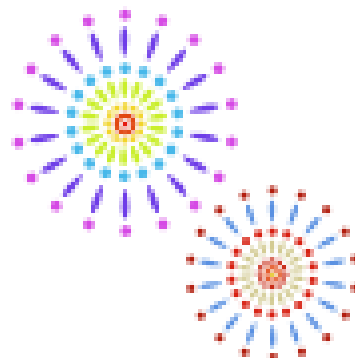
東近江総合医療センター 寺井 美貴

5月26日から30日までの一週間、初級者臨床研究コーディネーター養成研修に参加させていただきました。

研修ではCRCとして業務を行う上で基礎となる知識、GCP、ヘルシンキ宣言等についての講義から、実践的な内容まで幅広いものでした。その中でも、治験に参加される被験者の方への治験の説明を行う、インフォームドコンセント（IC）に関するグループディスカッションが強く印象に残りました。私は1年目のため、薬剤師として直接患者さんと接する機会もまだ無く、グループディスカッションでの被験者への説明は非常に難しく感じました。治験の参加にあたり説明すべき内容は多く、IC時には特に必要な事項を取り出し解りやすく説明する能力が必要とされることを実感するとともに、他施設の薬剤師の先生方や、他の医療従事者の方々の説明を聞くことも勉強になりました。また研修を通して、CRCは他の治験協力者との密な連携が必要であり、また被験者の方へ接する機会も多いため、より高いコミュニケーション能力が求められることを知りました。今回の研修では、国立病院機構内だけでなく他の病院の方々も受講されていたので、ディスカッション等を通じ交流する機会をいただけたことがコミュニケーションスキル向上の面でも刺激となりました。

講義のなかで、CRCの先生が被験者のご家族から「薬が開発される過程に携わってもらえて心強い」との一言に背中を押されたとのエピソードも強く印象に残っています。CRCは求められるものが多い職業であると思いますが、非常に遣り甲斐を感じられる仕事でもあることを知り、さらに業務への関心が高まりました。

当院では現在治験を実施しておらず、すぐに治験に携わる機会はありませんが、今回の研修を受講したことに留まらず、現在行っている製造販売後調査やEBM研究等の取り組みに研修で学んだことを活かし携わりたい考えです。



平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会 教育研修委員会主催  
中堅薬剤師研修会報告

京都医療センター 水津 智樹

開催日時：平成 26 年 7 月 19 日（土）12:30 ～17:00

開催場所：薬業年金会館

参加人数：51 名

今回、薬業年金会館で開催された中堅薬剤師研修会に参加させていただきました。本研修は近畿グループでは初めての試みということで、私を含む受講者は皆緊張していたようでしたが、司会の関本先生（神戸医療）の「楽しく」という言葉のおかげでリラックスして研修に臨むことができていたように思います（当日は気温も高く、休憩時間には冷えたペットボトルのお茶を頂けるという素晴らしいサービスも！！）。

はじめに、事例検討としてビジネスマナーに関してのロールプレイングを行いました。職場での挨拶や電話対応、上司に業務内容を的確に報告する方法など、他の先生方の対応を観察することができ、とても新鮮であり、また時に面白おかしくもありました。普段の自分の社会人としての対応を見つめなおすことができたと思います。次のグループセッションでは、各グループに与えられたテーマに沿って討議し、スライドを作成しました。そして本田先生（奈良医療）には中間監督者に求められる資質について講義をしていただきました。「よい監督者は同時に上司の良い補佐である」、「時代や社会の変化に常に注意を払い、必要な能力を向上させるべき」、「代行者を育てられる監督者こそすぐれた監督者」など非常に参考になるアドバイスを頂き、中堅薬剤師に求められることは多く、責任も重いと感じました。最後に、作成したスライドの発表を行いました。私が属したグループの課題は「目標を達成するための必要条件-中堅薬剤師の役割」でした。そしてグループの解答として、「中堅薬剤師はリーダーシップ・問題解決能力・指導力等を併せ持った、上司と部下をつなぐ役割」という意見で発表しました。各発表の後には他グループからも意見が出され、活発に議論がなされていました。

今回の研修で、職場ではまだまだ若手と感じていた私も中堅の立場という重要な役割を担っているという自覚を持つきっかけができました。そして私自身、当院の薬剤科をますます活性化、発展させていけるよう本研修で学んだことを業務に活かしていこうと考えています。また、最後になりましたが、早川先生（南京都）をはじめ多くの先生方にファシリテーターとして助言等を頂き、非常に有意義で“楽しい”研修会にさせていただいたことに厚く御礼申し上げます。

「平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会教育研修委員会主催  
中堅薬剤師研修会」に参加して

福井病院 吉川 三保子

7月19日(土)中堅薬剤師研修会に参加してきました。「福井病院」は、一番前で、緊張しないはずがありません。

そんな中、1 コマ目のマナーについては、「あいさつ」、「電話対応」、「アクシデント発生時」の3 題について、ロールプレイング見本があり、中堅薬剤師ならばどう対応するかというものでした。社会人として気をつけなければならないこと、報告の方法等がおりこまれており、ここで印象に残っているのは「あいさつ」はお互いが気持ちよく相手を認識することであるという解説でした。

次に課題について各グループで話し合い結果発表を行いました。課題は「中堅薬剤師からみた良い上司(先輩)・良い部下(後輩)の条件」、「活性化した職場とは—必要な中堅薬剤師の役割は?」、「目標を達成するための必要条件—中堅薬剤師の役割」、「チーム医療におけるコミュニケーションの役割(薬剤科内と他部門)」の4 題を各グループにふりわけ、各人が事前に提出した作文をもとに話し合いを行い最後に全体発表が行われました。各グループから出てきたキーワードは、「コミュニケーション」でした。私が属したグループでも、簡単な言葉であるが、良好なコミュニケーションをとることはなかなか難度が高いものであるという結果となり、今後の仕事をしていく上での課題となりました。ただ、全体の発表を聞いて感じたのですが、「コミュニケーション」の必要性をみんな感じつつも、コミュニケーションをとるとなると高い壁が生じてしまいなかなか乗り越えることが出来ないようです。良好なコミュニケーションがとれることにより各個人の間で信頼関係が生まれ、職場環境が整えられ、すべての職員が業務に対しやる気を見せる(これは少し過度ですが・・)ひいては業務効率が良くなり、薬剤科としてのパワーが上昇し、病院力が上がるどころまでなれば、また、各個人の仕事にフィードバックされてよりよい循環が生まれると仕事はより一層楽しくなるように思います。あと、グループでの話し合い中で感じたのは、仕事に関しての喜怒哀楽はグループ内各個人が共感したことです。

全体セッションとして中堅薬剤師像についての講義がありました。中堅であるということは、業務全体を把握し円滑に回るようにマネジメントしていくということが一番印象に残りました。中堅という立場は、上司でも部下でもあるため薬剤科内全体の業務を把握し上司からは業務内容を学び、部下からは業務等の教育・相談を受けるというものです。実際の職場で上司(先輩)の背中を見て中堅とはこんなことをするのだと感じていたことが講義として中堅という立場についてすべきこと、到達していなければならないこと、今後の目標とすべき方向性等を身につけることを講義として順序立てて聞き頭の中の整理ができました。良好なコミュニケーションをとり業務を含め各部署間、各人間の潤滑油となりマネジメントを行ってきたいと思います。

聴講できたことを含め研修会へ参加させていただけた事は、自分にとり大きな実りになりました。今後業務に生かしていけるように精進していきたいと思います。



## 地区会報告～大阪南部地区～

近畿中央胸部疾患センター 古川 順章

日時：平成 26 年 6 月 26 日（木） 19：00～22：00

場所：近畿中央胸部疾患センター 講堂

参加者 45 名（大阪 15 名 大阪南 15 名 近畿中央 15 名）

欠席者 37 名

議題：

### 1. 新会員紹介および各施設の業務取り組み、現状報告について

<新会員紹介>

大阪医療センター7名、大阪南医療センター4名、近畿中央胸部疾患センター5名の新会員が紹介された。

<各施設の業務取り組み、現状報告について>

#### 【大阪医療センター】

①薬剤師 40 名②薬剤師外来を稼働③病棟薬剤業務実施加算を算定。病棟間・曜日において薬剤業務実施時間にバラツキがあり、人員配置、業務内容に苦労している。④緩和医療チームの活動はがん患者を対象としてきたが、H I V 患者へ対象を拡大する。

#### 【大阪南医療センター】

①薬剤師 28 名、現在そのうち産休・育休中者が 3 名②薬剤管理指導件数は約 1000 件/月、退院時指導件数は約 150 件/月、病棟薬剤業務実施加算 3 年目となる③外来化学療法加算 A・B とともに約 200 件/月、外来化学療法における服薬指導件数は約 100 件/月である。

#### 【近畿中央胸部疾患センター】

①薬剤師 17 名で、薬剤管理指導件数は月に約 800 件、麻薬加算約 70 件、退院時指導件数約 30 件、病棟薬剤業務実施加算 1700 件である②5 月より休日 9：30～12：30 の超過勤務から、8：30～17：15 の通常勤務（振替休日）を実施③薬剤師外来を 5 月 22 日より稼働し、がん患者管理指導料 3 の算定開始。

以上、報告された

### 2. 意見交換会

### 3. グループ交流会

### 4. その他

- ①大阪南部地区 副理事変更について
- ②教育研修委員会の研究相談について

## 「平成 26 年度新採用職員研修」に参加して

南京都病院 脇 啓子

この度、4月9日から11日の3日間、新採用者を対象とした新採用職員研修に参加させて頂きました。1日目は各専門部門に分かれての講義でした。薬剤部門では、新人薬剤師が身に付けておくべきスキル・薬剤師の業務と責務・薬剤師を取り巻く環境の変化・病院薬剤師の業務拡大・チーム医療・医療安全対策について講義をして頂きました。その後、9人程の班に分かれ、検討事例や症例検討について班ごとに意見をまとめ発表致しました。検討事例では「処方忘れが招いた急性腎不全」という事例について、この発症を防ぐためには薬剤師としてどのような専門性を使ったアプローチができたか、また他職種とどのような連携が必要であったかなどを考えました。そして症例検討では、薬剤師役と患者役のロールプレイングを見た後、その症例を元に問題点とその対策を導き出し、SOAP形式で意見をまとめ発表しました。このワークショップは解決策を導き出すだけでなく、時間内にまとめるところまでが課題でした。これは想像以上に難しく、実際の現場においてこの一連の流れを一人で乗り切ることへの不安を感じましたが、知識と応用力の重要性を学び、日々の業務に取り組む中で徐々に成長できればと感じました。その後2、3日目は、各専門部門から構成されたグループでのワークショップを行い、部門間のコミュニケーションの大切さ、また言語・非言語の手段を用いて初めて意思疎通が成り立つということを学びました。最後に、接遇研修を受講し、薬剤師として、また社会人の一人として、接し方や言葉使いなどを、実践を交えて学ぶことが出来ました。また、病院での患者様との出会いは一瞬ではありますが、その一瞬の印象が病院全体の印象に影響するという事も再認識することが出来、接遇の大切さを理解することが出来ました。

この研修会への参加は採用後間もない時期で、不安もありましたが、最前線で活躍されている先生方から様々な知識や情報を教えて頂き、薬剤師として歩き始めたばかりの私にとって、大変有意義な3日間を過ごすことが出来ました。そして、この研修で学び得た知識、抱いた感情をこれからの日々の業務に活かし、初心を忘れずに業務に取り組んでいきたいと考えています。



## 「平成 26 年度新採用職員研修」に参加して

京都医療センター 上田 浩人

初めまして、今年度より新職員として薬剤科の一員となりました上田浩人です。皆様と一緒により良い医療を提供できるよう頑張っていきますので、どうぞよろしくお願ひします。

さて、私は先日国立病院機構近畿グループの新人研修を受けさせていただきました。研修は三日間という短い期間でしたが、薬剤師の心構えや医療従事者として、国立病院機構の職員としてどうあるべきかという講義を受けさせていただき、また様々な職種の方々、同期達とグループワークを行うことができ良い刺激になりました。そして、共に考え意見を交わすことで多くのことを学ぶことができました。そして、この研修の中で私が最も実感したことは、患者さんの立場にたつて考えること、他職種との連携が非常に大事であること、つまりチーム医療の重要性でした。一見当たり前のように思われますが、患者さんの立場にたつという意識はいつの間にか薄くなりやすいものだと感じました。また、医療の現場においてチーム医療が浸透してきているように思われますが、やはり職種間においても感じ方の違いがあるように思われます。

そこで私が目指す薬剤師像は、現在のチーム医療をさらに発展させ、その成果を患者さんに還元していける薬剤師です。一口に発展させるといっても様々ですが、私はまず自身に確実な知識をインプットしていき、それで積極的にコミュニケーションを図るとともに様々な職種の方に適切にアウトプットを行い、職種間での意識の違いを埋められる存在になることが理想への第一歩だと考えています。

私にはまだまだ知らないことばかりで日々勉強している最中ですが、同期達と切磋琢磨しながら、自分の理想を追いかけていきます。



## 病院薬剤師になって

東近江総合医療センター 松井 駿亮

病院薬剤師として働き始め、現在は調剤業務を始めとした中央業務に加え病棟へ上がり入院患者様や医師・看護師の方と接する時間も増えてきました。しかし、全ての業務を十分こなせているのかと問われれば自身の知識不足・注意力不足からの調剤ミスや他職種からの質問へ速やかに対応できていないなどとてもできているとは言えない状況にあり、薬剤科の先生方に日々助けて頂きながらなんとか業務をこなしているのが現状です。そのためまだまだ効率的に業務をこなす事ができておらず本来与えられているはずの病棟時間を圧迫しているため、今後正確かつ迅速に仕事をこなしていくことを一つの課題として捉え、より意識して取り組んでいく必要があると考えています。働き始めてからすでに4ヶ月が経過しているにも関わらず未だ基本的な業務も満足にこなせていない自分に歯がゆさも感じますが、今行っていることに加えこれから学んでいくことひとつひとつを疎かにせずしっかりと積み上げていきたいです。

またこれから始まる病棟薬剤業務実施加算は、持参薬の鑑別や月20時間の病棟業務を通して患者様の状態を把握することで、患者様の薬物治療における有効性の担保と安全性を確保し、薬害防止に努める必要があります。個々の患者様に最適で安心かつ安全な医療を行うためにもチーム医療の一員としての薬剤師の役割をより明確にし、これまで以上に積極的に患者様の薬物治療に関わることが求められているため、今行っている業務をより完璧なものとし、研修や学会を通じて自己研鑽を行うことで幅広い知識を身につけ、新しい仕事に対してもより柔軟に対応していきたいと考えています。

まだまだ未熟で至らないところもあり先生方には多くの迷惑をかけていると思いますが、適切な薬物治療を行っていく上で少しでも助けになれるように頑張っていきますので、今後ご指導のほどよろしくお願いたします。



## 病院薬剤師になって

舞鶴医療センター 生越 由美

大学 5 年次の長期実務実習を通して、病院薬剤師の先輩方が患者様の治療に様々な形で貢献している現場を体験し、この病院薬剤師という仕事に大変魅力を感じました。

舞鶴医療センターへ配属となった私達新人 4 名は、調剤業務に加え、TPN・化学療法は無菌調製、薬品管理、日直・当直業務、薬剤管理指導など様々な業務に携わっています。

現在、当院では、10 月からの病棟薬剤業務実施加算の算定開始に向けて始動しており、新人も 5 月下旬より各病棟へ配属され、積極的に病棟へ上がっています。私は小児科・産婦人科にあたる母子医療センターへ配属となり、主に小児科を担当しています。当院は京都府周産期医療サブセンターに指定されており、京都府北部から福井県に及ぶ広い範囲において新生児搬送を受け入れています。病棟へ上がると、薬の知識だけではなく、病態や治療などにおける知識の必要性を実感し、あらゆる面で自身の知識・経験不足を痛感します。また、病棟業務を日々行う中で医療従事者から求められるものに即座に答えるために、より勉強しなければならないと感じると同時にやりがいも感じています。カンファレンスへの参加や電子カルテ上の診療記録・看護記録・検査データなどを通して治療方針を理解し、その薬物治療の妥当性を把握した上で適切な処方提案や情報提供が行えるように、日々の勉強を通して知識と経験を積み重ねていきたいと思えます。

また、個々の患者様の症状に応じた効果と安全性の高い薬物治療を提供するために、医療従事者と積極的にコミュニケーションをはかり情報共有することで、1人1人の患者様に対し、薬剤師として何が出来るかを常に考え、医療に貢献していきたいと強く思っています。

私が薬剤管理指導を行うにあたって気になっている事は、子どものコンプライアンスです。この向上には、患者様の御家族の協力と理解が必要であると強く感じています。そのため、患者様本人と御家族の意見を客観的に受け止め、医師や看護師にフィードバックを行うと同時に、患者様やご家族への服用意義や適切な服用方法の指導を繰り返し行うことを心掛けています。しかし、私自身の力不足のゆえに十分な指導を行えずに退院される方もいらっしゃいます。その様な患者様を少しでも減らせるように、スタッフと連携をとり、患者様の背景をより把握して、処方薬に関して納得・安心して服用して貰えるような服薬指導を心掛け、日々改善していきたいと考えています。また、医師への剤形変更や代替薬の提案等も積極的に行っていきたいと思えます。

舞鶴という場所は、地理的・気候的な面において不便ではありますが、常に懇切丁寧に指導して下さい、私達の未来を見据えたアドバイスを下さる先輩方や、互いに切磋琢磨する同期がいる環境は大変満たされていると感じます。

ご迷惑をおかけすることも多々あると思えますが、薬剤師としてより一層精進して参りますので、先生方にはご指導・ご鞭撻の程をよろしくお願い致します。

## 病院薬剤師になって

京都医療センター 宮地 由香里

病院薬剤師になることは小学生からの夢でした。物心ついたときには「将来は薬剤師になる！」と言っていた気がします。大学で6年間学び、実務実習を経験し、病院薬剤師だけが道ではなく、企業やドラッグストアで働くことも考えました。しかし実際に働き始めて、私は病院薬剤師の仕事をちゃんと理解していませんでした。そして私が選んだこの道は間違っていなかったと胸をはって言えます。

春から京都医療センターで働き始めて4ヶ月が経ちました。はじめて調剤印を押したときはやっと夢が叶い、とても嬉しかったです。しかし知識もなく、覚えることも多く焦ってただ仕事を処理する毎日になっていました。そんな時に先輩薬剤師に「新人でも患者さんや他の医療従事者からしたら1人の薬剤師」と言われ「新人だから」と甘え、患者さんに対して責任をもって接していないことに気がつきました。病院で働いていると毎日多くの様々な疾患を有する患者さんと接するけど、患者さんにとっては1回1回が大切な治療で新人でもベテランでも関係なく薬の専門家としてかけがいのない存在であることに気がつきました。私は薬剤師の仕事は受け身だと勘違いしていました。実際に病棟見学で先輩薬剤師について回ると医師が処方した薬が間違っていなくても患者さんに最善の薬があれば積極的に提案し、患者さんよりも患者さんの変化に気づき、抗がん剤の運用、レジメン作りを医師と協働して行いあらゆる面で能動的に活躍し、また薬剤師として責任をもって働いていました。病院は患者さんの近くで多岐に渡って患者さんの治療に携われる場所であり、薬剤師の職能が一番発揮できる場所だと思います。

今はまだ知識もなく、一人前になるにはまだまだ時間がかかりそうですが「この薬剤師さんでよかった」と患者さんに思われるように成長したいです。





## 病院薬剤師になって

京都医療センター 小玉 美希子

今春から薬剤師として、また新社会人として京都医療センターで働き始めて早3ヶ月が過ぎました。新人研修や薬剤科内での中央業務ローテーションなどを経て仕事をする中で、日々自身の未熟さや不勉強を痛感しています。また実習生からの質問に対応する度、自身も勉強しなおす機会を得る一方で教えることの難しさを感じています。

薬剤師名簿に登録され調剤印を押せるようになった日は、長年目指してきた薬剤師になる喜びを感じ、同時に一薬剤師として患者さんの治療に関わっていくのだという責任に気が引き締まりました。

調剤や問い合わせ、そして今後始まる病棟への配属などを通して患者さんの治療にかかわるのだという緊張感を常に感じています。多くの先輩薬剤師が病院内外の勉強会に参加したり地域連携に努めたりする姿を見る度に、患者さんのために自分ができる最善を出し切っていかなければいけないと強く思うようになりました。

最近病棟での業務を見学するようになり、患者さんとのやりとりや事前の準備、他職種とのやり取りなどをみる中で、話の仕方や記録の取り方など細かな気配りがされている事に驚きました。自身が患者だとしたらこんな薬剤師から説明を受けたいと感じることが多々あり、今後病棟業務で何をするかということだけでなく、その先にどんな薬剤師になりたいかを考えさせられます。正しい知識をもとに治療に貢献したい、チーム医療に参画したい等学生時代に誰もが抱いたような目標の実現には、まずそれを噛み砕いて自分にできる事を考え、地道に取り組むより他ないと今は感じています。

業務を通し、仕事とは引き継ぎ協力して行うものだからこそ次の人を考えて動かなくてはならないと学びました。最後には患者さんの治療に行き着くことを忘れず、巨視的な目線で業務の本質を捉え、周囲を見ながら働けるように今後努力していきたいです。



## 趣味のページ ～部活～

大阪医療センター 坂倉 広大

大阪医療センターの坂倉広大です。趣味は部活です。何の部活かと申しますと、山登りです。部活といっても正式でも何でもなく、ただ友人達と2年前より始めた集まりです。活動は月1回、適当に人数が一番集まる日に登っています。登山と言えるかわからないレベルですが、しっかりと登山グッズを身に着け、六甲山や生駒山など体に易しめの山がメインです。下山後は、そのまま飲みに行き、次回の日程と山を決めています。現在、部員は9名、年齢は25-30歳で部長は私と同学年です。職種は全てバラバラです。



趣味は、ずっと続けていきたいものでありたいと思うものとして、過去を思い返してもストレスが少しでもあると辞めてしまったものは数知れず。この山部ですがストレスなしの部活を主軸とし活動しています。飲み過ぎ二日酔いの人は当日不参加でも問題なし。寝坊と連絡があれば、2時間は余裕で待つといった緩さもあります。しかしながら、山をなめてはいません。山登りの基本としてしっかりと水分量、約20分おきには水分をとるために立ち止る、を理解し欠かさず給水しています。雨天の疑いがある日はその月の山部はなしにしています。また、12-3月までは凍っていたりと危ないので、山登りはせず、体育館でスポーツしたりうどんを食べに四国へ行ったりといった時間を過ごしています。昨年ついにチームTシャツも作成しました。発汗性抜群のものであり、デザインは、酔っぱらいながら部員が決めたものです。

色々なコースの中でも私は特に2つのコースを気に入っています。1つは、阪急芦屋川

から六甲山を登り出口は有馬温泉そして有馬温泉で湯につかり飲んで帰宅のコースです。2つは、ナイト登山です。一度上った山へヘッドライトをつけ日が沈んでから登ります。



山は色々なことを学ばせてくれるもので、挨拶を学び、人のペースに合わせることを学びなどは誰もが同じことを言いますがやはり間違いありません。昨年特に記憶に残っているものがあります。夏の日照りの時期、山の途中にある池の水位が下がっていてコイの背びれが出ている光景がありました。今日晴れてよかったと朝登山前にみんなと話していた自分が恥ずかしくもなるものです。おかげでといいますか、その光景を思い出すとビアガーデンやバーベキューで雨が降ろうと嫌な気持ちはなく素直に笑えるものです。幼稚園で

習ったことを今更ながらにして学んでいるのも悪くないものです。

最期にですが、題名に趣味は山登りでなく部活と書かせて頂いたのは、今後もし事故や病気で足が思うように動かせなくなる部員も出るかもしれません。その時、他の部活を趣味として考えなければいけないと生意気ながら考えてのことです。今の部員と遊ぶことは飽き性の私が長く続けることができる趣味ではないかと考えます。



次号ですが、国立循環器病研究センター、中野一也先生にバトンをお渡ししております。私もとても楽しみにしております。



## 編集後記

- ♪ 立秋も過ぎ、暦の上では秋ですが、厳しい残暑が続いています。今年8月までの最高気温は群馬県館林市の39.5度が記録されました。熱中症により救急搬送された患者が8000人も超えた週もあったようですが・・・皆様体調は崩されていませんか。
- ♪ ユニバーサル・スタジオ・ジャパンに、7月、米人気映画「ハリー・ポッター」をテーマにした新エリアがオープンしました。これにより、関西への旅行やツアーが人気を集め、ツアーの予約人数は今年の5倍以上、「ハリポタ特需」とも言われているそうです。皆様はもう行かれましたか。
- ♪ お盆の帰省ラッシュやイベントに影響を与えた台風11号。栃木県で竜巻、三重県で大雨と、中心から500キロ以上離れた地域でも大きな被害が出ました。気象庁によると、「レインバンド」と呼ばれる、帯状に発達した積乱雲が原因といます。台風から離れていても油断は禁物ですね。
- ♪ 29年前の1985年（昭和60年）8月12日、群馬県上野村の御巣鷹（おすたか）の尾根に日本航空のジャンボ機が墜落し、国内の航空機事故としては最も多い520人が犠牲になりました。事故当日には、慰霊登山が行われています。遺族の高齢化が進むなか、当時幼かった子どもや事故のあと生まれた孫など若い世代の姿も多く見られ、事故の悲惨さを次の世代に語り継ぐ必要性を訴える声が多く聞かれたそうです。
- ♪ 今月号も科長提言、薬剤科紹介、薬剤師会講演報告、学会報告、新採用者の研修参加記や抱負、趣味のページなど、充実した読み応えのある内容となっております。最後までご熟読ください。

(A.N)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

近畿国立病院薬剤師会会誌

第三十九号 平成26年8月発行

発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局

大阪市中央区法円坂2-1-14

(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 山崎 邦夫 (大阪南医療)

編集 広報担当理事 宮部 貴識 (大阪南医療)

広報委員 本田 富得 (大阪南医療) 川端 一功 (大阪医療)

中西 彩子 (奈良医療) 朴井 三矢 (京都医療)

小西 大輔 (大阪医療) 岩槻 瑠美 (南和歌山医療)

奥田 直之 (大阪医療) 田中 絵理 (大阪南医療)